

## 近代ノスタルジーの諸相

－ドイツ再統一後のオスタルギーの特殊性について－

立山 千夏

### はじめに

第二次世界大戦が終わり、1945年にヤルタ会談にて終戦後のドイツの処遇が決定され、ドイツはアメリカ、イギリス、フランス、ロシアの占領下に置かれた。その後ドイツ連邦共和国（以下西ドイツ）とドイツ民主共和国（以下東ドイツ）に分かれ、西ドイツは資本主義、東ドイツは社会主義の国となった。東ドイツと西ドイツの間には通行規制が敷かれたが、東ドイツから西ドイツへの人口流出は止まらなかった。それを防ぐ目的で1961年に建設されたのがベルリンの壁である。これは冷戦の象徴として「鉄のカーテン」とも呼ばれ、1989年に壊されるまで約30年間に渡って東西ベルリンの間にそびえ立っていた。

ベルリンの壁が1989年の11月9日に崩壊したことは、多くのドイツ国民にとってもドイツ政府にとっても予測していないことだった。チェコやハンガリーなどを通じて東ドイツ国民が西ドイツへ亡命することが多発しており、その第三国を通じての越境に対策するため、東ドイツ政府が「11月10日から、ビザ取得のための手続きを設けるが、東側住人の海外渡航を許可する」という規制緩和についての新規則が決議された。報道によって東西ドイツ間の国境解放が広められ、ベルリンの壁が崩壊することとなった。これによって東ドイツが国家としての崩壊を迎えた。

アンダーソンは「国民は一つの共同体として想像される。なぜなら、国民のなかにたとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、国民は、常に、水平的な深い同志愛として心に思い描かれるからである。」と述べている(2007:26)。システムとしての東ドイツは消滅したが、それと同時に「想像の共同体」としての東ドイツも消滅したのだろうか。

考慮すべきは、社会主義のもとにおける「国民」の位置づけである。アンダーソン自身、マルクス主義に基づく社会主義が必ずしも均一な国家を形成しなかったことを重視し、想像の共同体を構成する要素は多様であることを認めている。例えば、東西ドイツ統一後に「壁があった頃のほうがよかった」という崩壊前の時代を解雇し、懐かしむ風潮が生まれたことが知られている。このノスタルジーはドイツ語で東を意味する”Ost”と懐古を意味する”Nostalgie”という二つの語を組み合わせた造語「オスタルギー」により概念化され共有されるにいたる。筆者はこれを「想像の共同体」としての東ドイツのあらわれであるという仮説を立て、議論を展開していく。

本稿の構成を示すと以下のようなになる。はじめに1章ではオスタルギーがどういったものであったかについて整理する。続いて2章では東ドイツがどのような国家だったのかについて議論する。次に2章ではベルリンの壁が崩壊したあとのドイツの状況について整理

し、オスタルギーが生まれた背景について考察していく。3章では二つのドキュメンタリーと映画を取り上げて、当時のドイツ国民の様子や心情について分析し、オスタルギーがどういったものであるかを考察していく。最後に4章で現在も残っているオスタルギーについて触れ、現在の「想像の共同体」としての東ドイツがどうなっているのかについて考える。

## 第1章：オスタルギーとは何か

オスタルギーとはノスタルジーの一種であり、ベルリンの壁崩壊後に旧東ドイツ国民が東ドイツを故郷として想起し懐古する現象である。Emnid というドイツの民間の世論調査会社が2009年に調査した結果、元東ドイツ人のうち49%が「東ドイツには悪い面よりも良い面があった」と回答している。さらに8%は「今日よりも幸せな生活を送っていた」と回答した。

故郷の誕生について、成田は以下のように述べている。

「故郷」は、いくつもの拠点と論理をもち構成されている。歴史と地理、そして言語。時間、空間と移動。これらは、過去と現在をむすびつけ、未来へと向かう時間的一体性を形成する。また、共通の言語を操り、共同の習慣をもつ空間的一体感を醸成する。そして、これらがともに共通の起源を持ち、共通の文化となり、共通の感情を養成するという「語り」によって、共通の時空間が「共通の故郷」と名づけられ、たちあられる。(1998:91)

ドイツはもともと一つの国家であったが、西ドイツと東ドイツというイデオロギーが異なる国家となった。言語は同じものを使用しているが、イデオロギーの違いから生活の習慣も異なった。そのため故郷も次第にドイツではなく西ドイツと東ドイツで分けて想起されるようになっていったのではないかと考える。

高岡はノスタルジーについて以下のように述べている。

ノスタルジーは近代社会の産物である。近代以前にも望郷の念は存在したが、それが社会に広く共有されるのは近代以降のことである。ノスタルジーという感情／現象は近代以降に出現するだけでなく、近代社会の存立構造そのものと分かち難く結びついている。新しい技術の発明、都市化と産業化、国民国家とナショナリズムの誕生、近代特有の不安が、ノスタルジーを不可避的に招来する。(中略)ただし、人が故郷を離れ都市へと移住

することは、そのまま「ノスタルジー＝郷愁」の誕生を意味するわけではない。なぜなら、そもそも故郷は決して美しいものではあり得なかった。人は豊かさを求めて貧しい農村を捨て、しがらみと束縛に嫌気がさして村落共同体をあとにした。貧しさや停滞の象徴である農村が「美しき風景」へと変容するためには、一定の操作が必要となる。

(2007:113-114)

ノスタルジーの亜種であるオスタルギーも、上記に沿って説明できる点が多々ある。西ドイツは資本主義経済であったために西ドイツでは様々な産業が発展していったが、東ドイツは社会主義経済であったため工場でのノルマさえ達成できていればよく、それぞれの経済にも大きな差が生まれていた。1991年の時点で、旧西ドイツの地域の雇用者一人あたりの国内総生産が45,235ユーロであるのに対し、旧東ドイツの地域は20,150ユーロで二倍以上の差がある。それだけでなく、1989年から1990年にかけての大都市<sup>1</sup>は西ドイツに66箇所、東ドイツに15箇所である。西ドイツは東ドイツの2倍以上の国土面積を持つが、それを考慮しても明らかに西ドイツで都市化が進んでいることがわかる。

近代特有の不安については該当しないと考えるが、東西ドイツ統一特有の不安はあった。制度的な統一は、統一条約に基づいて社会と国家のあらゆる分野で迅速に西側の制度へと合わせた改革が進められた。東ドイツの国民軍の解体と連邦軍への統合も行われ、社会保障制度や道路交通標識に至るまで西側の方式が採用された。旧東ドイツ地区には中古車販売業社やスーパーマーケットのチェーン店などがこぞって店舗を設けた。西側の高い生産性とそのシステムが流入したことにより東側の極端に生産性の低い旧国営企業は売却され、労働者は大量解雇された。政府はインフラ整備や失業対策、企業援助などをおこなった結果政財は赤字に転落した。これは1999年にユーロが導入されるまで続いたが、ユーロ導入によって物価高が起こり、失業者の多い旧東ドイツは大きな打撃を受けた。また、学問についても西ドイツのモデルへ変更された。分野にかかわらず多くの東ドイツの学者が解雇され、旧西ドイツ時代には教授の地位につけなかった大学講師が旧東ドイツの大学で教授になることができた例も多くあった。

東西ドイツ分断中に西へ亡命した人々が元々住んでいた東側の住居は東ドイツの当局に没収され、東にとどまった人々に提供されていた。これらは統一条約によって「賠償よりも返還を優先する」と言う原則が確定していたため、統一後に元の持ち主から正当な変換申請が行われた場合はそこに住んでいた旧東ドイツ国民は立ち退かなければならなかった。しかし申請が許可されたのは4分の1程度で、旧東ドイツ地区の不動産がきちんとした手

---

<sup>1</sup> 使用した bpb の統計では、人口 10 万人以上の都市を大都市と定義している。

続きによって継承されていた場合—没収された家に最初に住んでいた人が亡くなり、その相続人が引き継いでいたような場合や、売却によって人手に渡っていたような場合など—は返却する必要はなかった。また、該当の土地が団地になっていたり公共の土地になっていたりした場合も返還できなかった。ただし、土地ごと返還できた例もある。ライプツィヒのとある旋盤工場は戦前の持ち主に返還されたが、しかし持ち主はその直後に 1200 人の従業員を全員解雇した。このように、東西統一後のドイツでは社会が大きく変化しており、旧東ドイツ国民は失業問題などで生活を脅かされる不安を抱える状況にあった。これらの不安によって、不自由が多かったはずの東ドイツが美化され、オスタルギーの発生へとつながったのだと考える。

## 第 2 章：東ドイツとは何か

東ドイツの社会主義統一党は、1946 年に当時のソ連軍占領地域で既存のドイツ共産党とドイツ社会民主党が合併して成立した社会主義政党であり、カール・マルクスの思想に基づくものだった。社会主義統一党は 1973 年以降の東ドイツの体制を「現に存在する社会主義(real existierender Sozialismus)」と呼称していた。これについてバーロは「現実に存在している社会主義は、マルクスの社会主義理論の構想とは原則的に別物の秩序である。(中略)現実に存在する社会主義の本質とは、まだ転換点にまでは達していない古い分業に基づく普遍的国有化という疎外形態をとった社会化である。」と批判し、以下のように述べている。

いまここで、現実に存在する社会主義のことを考えてみよう。そこでは、収入もさまざまだが、これをはるかに上回る社会的不平等が培養され、重労働や商品生産、貨幣が消滅せず、古くからの分業が合理化され、一見教会風な家族政策、性政策がとられ、フルタイムで働く党の幹部職員がいて、上ばかりに責任をとる常備軍と警察があり、人民を同調させ後見するための公の団体があり、無様な国家機関が国家官僚機構および党官僚機構とに二重映しになり、そうして各国の間で孤立している—こんな有様がマルクス・エンゲルスの見解といかにかけはなれているかは明々白々である。(1980:34)

東ドイツでの社会主義はマルクスの理論とは本質的に異なったもので、国内からの批判も存在した。1980 年以降は東ドイツの各地で月曜デモが行われたが、平野によればこれに参加する人々は大きく三つのグループに分かれるという。一つ目は西ドイツへの移住申請を拒否された者、二つめは「真の社会主義」を求めて立ち上がった者、三つ目はプロテスタントのキリスト教徒たちである。「真の社会主義」を求めて立ち上がった者について平野は

「理念と現実との乖離が見過ごすことができないほどおおきくなったと彼らが判断したとき、現実を、理想に近づけようと改革の動きに発展した。」と述べている(2002:76-77)。この「独自の社会主義」が東ドイツのみに見られるものであるとは断定できないが、東ドイツの政治形態はそもそもソ連とは土台が異なるものであるため、多少の違いはあったのではないかと推測する。

また、社会主義国であるという東ドイツのアイデンティティーを守りながら積極的に工業の発展の遅れを克服するために、国家の手による抑圧が行われていた。楠根は東ドイツ国民と社会主義の様子について以下のように述べている。

東ドイツは確かに管理され、監視され、物が少ない社会であるが、そのような社会で生きていくために、正式のルートに頼らない人脈やネットワークを通じて、困難を緩和する知恵が発達した。(中略)東ドイツ人はそのようなネットワークを使って様々なものを調達し、不自由をしのいでいた。(中略)逆説的だが、硬直した社会システムの中で相互扶助が進んだとも言える。

生活への社会主義のあらわれとして、抑圧された社会の中で互いに助け合いながら生活していくうちに、人間関係が重視される空間が誕生したことが推測できる。物は少なく社会に不満を覚える点多々あるが、その不満を共有しているという点で人々が共同体として結束していった。本稿では、これが東ドイツ国民にとっての「想像の共同体」としての東ドイツである、との仮説を立てる。以下、小説と映画に描かれたオスタルギーを例に仮説の検証を試みる。

### 第3章：小説と映画からの分析

#### 1 節：『ベルリンの壁の物語(下)』

イギリス人のジャーナリストが東西分断からベルリンの壁崩壊後までのほぼ30年の間に、数多くの人々にインタビューしてまとめ上げたドキュメンタリーである。旧東西ドイツの一般市民、政治家、アメリカおよびイギリスの軍関係者、国境警備兵など様々な立場の人の証言が記述されている。

前述した通り、ベルリンの壁が崩壊したことは多くのドイツ国民にとって驚くべきことであり、また喜ばしいことでもあった。11月10日の午前2時頃、ブリダという東ドイツに住む女性が、西側に住むメフメットという恋人に連れられて検問所に行ったときの証言が以下のように記されている。

二一年の人生で、彼女はの時こそ最大の驚きを味わった。「私たちは境界を越えた。同時に二人の若い女性も越境したが、彼女たちはとても嬉しそうだった。この瞬間、私は自分のしていることを理解していなかった。何も考えずメフメットの腕の中にいたのだ。二人で少し踊ったがそこは路上で、大勢の人が『こんにちは、ご機嫌いかが』と叫んでいた。みなシャンパンを飲み、ワインを飲み、歌をうたい、泣いていた」

国民がその突然の出来事に熱狂に包まれたことがよく分かる。しかしこの熱狂が冷めるにつれ、次第に東西ドイツの人々の意識の中にある「見えない壁」が現れ始めるのである。それが良くわかるのが、ルツ・シュトルツの妻であるウーテの証言である。

「<sup>ヴェンデ</sup>変化[東ドイツ人は一九八九年から九〇年にかけての出来事をこう捉えていた]のあと、子供のころの古い友人が何人も西ベルリンへ来てほしいと言ってくれ、何度か招待してもらったけれど、最初の高揚感が沈静してくると、その古い友人の多くとはずっと冷ややかな関係になっていった。実際、連絡を取り合う相手は二人だけになった。その二人は私たちのことを知的に恵まれない、愚かな東ドイツ人だなどとは思わなかったから」。ウーテは自分のことを語りながら、多くの東ドイツ人の代弁をしている。「人間ならもちろん、多少のプライドを持っているものです」

旧東西ドイツ国民の間にある「見えない壁」は、壁崩壊以前から存在した。東西ドイツではそれぞれ「ドイツマルク」と「オストマルク」ということなる通貨が使用されていたが、オストマルクの価値はドイツマルクの4分の1から5分の1程度しかなかった。東ドイツは東側諸国の中では優等生と言われていたが、西ドイツに対しては拭えない劣等感があつた。

また、この壁はすぐに解消されるものではなかった。同書籍中には筆者が壁崩壊当時にインタビューしたビルギット・クービシュという女性に10年後もう一度インタビューをした箇所がある。その筆者との対話の中で「過去を惜しむことはあるか」と問われたビルギットは「どちらかを選ぶことはできない」と答えながらも、「でも、印象的なのは、一〇年経ったいまでも、東西に住む人たちのものの考え方が、大きく違うことです。」と述べている。さらに世代間の連続性についてビルギットは以下のように感じている。

「ここ東側のある世代は、余所者意識を抱いているけれど、それには二つの面があります。一つは、故国を失ったこと——東ドイツがどんな国家だったにせよ、彼らの人生に

は意味があった。もう一つは、次の世代から理解を得られないだろうということ。次の世代は、過去の出来事をとて理解できないに違いない。そんな二つの面から、彼らは余所者意識を抱いているんです」

ここで言われている余所者意識とは、旧東ドイツ国民は自分たちが余所者になったように感じているということだろう。東西ドイツが統一され「一つの同じドイツ人である」という状況になったからこそ、より強く東西の違いや疎外感を抱いてしまったのではないかと推測する。さらにベルリンの壁が崩壊してから「オッシー(Ossi)」と「ヴェッシー(wessi)」という言葉も生まれた。これはそれぞれドイツ語で「東(Ost)」と「西(west)」を表す言葉から来ており旧東ドイツ国民と旧西ドイツ国民のことを指すが、これに加えて互いの蔑称も生まれた。何かとひがみを言うことの多い旧東ドイツ国民を指す「ヤンマーオッシー(Jammerossi)」(嘆く、不満を言う、という意味の *jammern* と組み合わせた言葉)と、なんでも自分の方がわかっていて上であるという調子の旧西ドイツ国民を指す「ベッサーヴェッシー(Besserwessi)」(自分の方が物知りであると自惚れているという意味の *besserwiserei* という言葉とかけている)である。事実上東西ドイツが統一されて一つになっても、国民の意識の上ではまだお互いを区別し、あまつさえ反発を抱きあっていたのだ。

## 2 節：『伝説となった国・東ドイツ』

旧東ドイツに留学経験を持つ筆者が長期取材を通して、東西ドイツ統一後 10 年が経過した旧東ドイツの内部からインタビューを通してその現状を描いたドキュメンタリーである。

東西ドイツ人との差別について、旧東ドイツ出身で仕事上よく旧西ドイツ人と付き合いがあるエルケという女性は以下のように語っている。

「私はすべての西ドイツ人が傲慢で、私たちを見下している、と言うんじゃないのよ。たとえばわたしの上司なんだけど、この人はとってもいい人で、話もわかるのよ」とエルケさんは嬉しそうに言う。

しかし、このような人は例外だと彼女は直ぐにつけ加えた。それどころかほとんどの西ドイツ人からは彼らの「何気ないことばの端々に無意識な、それだけに底の知れない偏見を感じる」。(中略)「西の人たちは自分たちが全部東の面倒をみてやっているとと思っているのよ。私たちだって応分の負担<sup>2</sup>はしているのに」。

---

<sup>2</sup> 連隊税：旧東ドイツ復興のために導入された税。所得税または法人税の 5.5%が全ドイツ国民に課されているが、今年、2021 年から納税者の 9 割を対象に廃止する方針が決定した。

旧東ドイツ人とは違い、旧西ドイツ人はほとんどの人が統一後も変わらない生活を送っている。しかし生活水準は低下しており、毎年のように値上げされる各種公共料金や旧東ドイツ復興のために導入された連帯税などによって“東のせいで損をしている”という考えを強く持つ旧西ドイツ人が多かった。そしてそれが旧東ドイツ人に伝わっているということも問題であり、互いの対立を生む要因の一つとなった。エルケは旧西ドイツ人の旧東ドイツに対する評価について、次のように語っている。

「西の人はね、わたしたちに東ドイツについて講釈するのよ。東にきたこともないくせに。しかもその講釈たるや、『東独は全体主義国で、個というものがなく、人々は惨めな生活で……』、『あんな国のことなんかわすれちゃいなさいよ』とかで、こっちが『東にもいいところはあった』なんて言ったら、びっくりして“こいつまだアカなのか！”っていう顔をするのよ」

一方で東ドイツから西ドイツに亡命したアンゲラという女性は「憂鬱な日々だったわ。買い物にいても列になればなければならないし。品物も順番どおりに売られ、自分で選んで買うこともできなくてね。それにハンガリーに旅行に行きたいと思って申請しても、理由もなく不許可なんてこともあった」と語る。東ドイツからは多くの亡命者が西ドイツに流れ、反政府デモには多くの東ドイツ国民が参加した。東ドイツ国民の多くは政府に不満を持っていたのは事実だが、最後まで東ドイツに残っていた人—残りたくて残っていたかどうかはさておき—にとっては“よそ者”である旧西ドイツ人に外側から否定されることによって、反抗心が過去の美化を助長するのだろうと考える。

旧西ドイツ人と旧東ドイツ人の溝は、互いの労働観の違いにも要因がある。成田は東西での労働観の違いについて以下のような例を挙げている。

ある留学生の知人が経験したことだ。店でかれがセーターを買おうとすると、店員は「もうこれしかない」という。つまり「これしかない」から売りたくない、というのだ。いやービックリしたよ、とかれはいつていた。わたしも、つり銭がないと店員に叱られたことがある。勘定場で札をだすと、店員は細かいお金がないと怒る。小銭ぐらい用意しときなさいとでもいうように、彼女はわたしを睨むのだ。結局つり銭はもらえなかった。東独社会は金がものをいわない社会であった。

さらに旧西ドイツ人は旧東ドイツ人を「商売というものがわかっていない」と言う。しかしそれは当然のことであると言える。東ドイツに限らず、旧社会主義国人進出している企



業を悩ませているのは、人びとの労働意欲の低さだ。欠勤率が高く、それを防ぐための「皆勤手当」という餌も実をあげていない(朝日新聞)。旧東ドイツにとってはそれが普通だったが、資本主義の旧西ドイツ人には理解ができなかったのである。

成田は旧西ドイツ国民と旧東ドイツ国民の対立について以下のような意見を挙げている。

統一時、西ドイツ人たちの多くは東のための負担(増税)は覚悟していた。彼らはあたたかく「東」を見守るつもりでいた。それは刑務所帰りの身内が、更生しようとするのにたいして、頑張り、こちらも支援は惜しまんぞと声援するかのよう。しかし「いまだに『東にもいいところはある』なんていってる連中に、なぜぼくたちの税金を」「東の人は(ベルリンの壁崩壊から)一〇年も経っているのに、なにも学んでないようだね」(男・三〇代)とすっかり風向きが変わった。(中略)

東ドイツ人の言い分はどうか。

彼らはいう。なにを反省しなければならんのかと。

一部の東ドイツ人は東ドイツに生まれ育ったことを、かけがえのない経験と思う。

「だって、二つの体制を知っているわけだから、常に比べられるだろう」。いわゆる「一身二生<sup>3</sup>」ということだ。

多くの東ドイツ人たちは、社会的格差があまりなかった東、集団主義で人のつながりが強い東から、相手の肩書によって態度をかえたり《わたしはわたし、きみはきみ》の個人主義的資本主義社会はこたえた。「冷たいんだよ」(男・学生)と。

旧西ドイツ国民にとって東ドイツは悪いものであったが、旧東ドイツ国民にとっては不満はあれど「故郷」であった。その認識の違いが互いの態度に差を生み、軋轢が生まれた。それがイデオロギーの違いによる価値観の違いや旧東ドイツ国民の抱く劣等感によって増長し、旧東ドイツの美化に繋がったのだろうと考える。

### 3 節：『グッバイ、レーニン！』

東西ドイツ統一後のとある家庭で起きた悲喜劇を家族像とともに描いた映画作品である。主人公は東ベルリン出身のアレックスという青年である。アレックスの母のクリスティアーネは夫のローベルトが東ドイツに亡命したショックから社会主義に傾倒していた。ところがアレックスが40周年記念式典のときに反体制デモに参加しているところを目撃し、強

---

<sup>3</sup> 福沢諭吉の言葉。福沢はその前半生を封建時代に行き、後半生は西洋文明の時代に生きた。「一心にして二世を経るが如く」前半生と後半生を比べることにより西洋文明が西洋文明人よりも深く理解できるという意。

いショックを受けたクリスティアーネは心臓発作を起こし倒れてしまう。昏睡状態に陥った彼女は8ヶ月後に目を覚ますが、その頃にはベルリンの壁が崩壊し、様々な体制が変わっていた。再び発作が起きれば命取りになると医師に告げられたアレックスは、ベルリンの壁が崩壊して東西ドイツが統一されたことは母にとって強いショックになると考えた。そのためクリスティアーネを家に連れ帰り、姉のアリアネや周囲と奮闘しながらすっかり“西側風”に変わっていた家を以前のように戻し、母が求める東側製品を探し回る。しかしクリスティアーネの病状は悪化していき、アレックスはドイツ人初の宇宙飛行士であるジークムント・イエーンによく似たタクシー運転手の協力を経てドイツ統一の偽ニュースを作る。西ドイツに渡った父親はそこで再婚し新しい家族と生活していたが、アレックスの計らいによって二人は再会し、それから程なくしてクリスティアーネは亡くなった。以上がこの映画の概要である。

ベルリンの壁崩壊の熱が冷めやらぬ中、旧東ドイツの廃墟でアレックスの恋人であるララが「お母さんに見せたいわね」と言うが、アレックスは「見たらショックだ。信じてたものが一瞬で消え去った」と返す。ベルリンの壁が崩壊したことは自由を求める多くの人々にとって喜ばしい出来事であったが、中には熱心な活動家として政府を支持していた者もいた。そういった人にとっては確かに「信じていたものが一瞬で消え去った」状況であると言えるだろう。

アレックスがもともと働いていた会社はベルリンの壁が崩壊したあとに潰れたが、アレックスは“運よく”新たな仕事に就くことができた。その職場で一緒に組むこととなった旧西ドイツ出身のデニスは、初仕事を終えてアレックスに「同志(Genossen)だ」と言う。この場合の「同志」という呼称の仕方は社会主義特有のもので、デニスは「自分たちは一緒に仕事をする仲間である」という意図で旧東ドイツ出身のアレックスに歩み寄ったような発言をしたのだろう。序盤、アレックスの生活が比較的安定している場面では旧東西ドイツ間の溝ととれるものは登場しない。1節にもあったように、壁が崩壊してすぐの互いの違いを意識する前までは互いに好意的だったのだろうと考えられる。

母親を病院から自宅に移すことになった際、アレックスはリサイクルショップから東ドイツ時代の服を買ってくる。それを姉に渡すと、彼女はそれを見て「ダサイ服を着ていたものね」と発言する。これは価値観の変化であり、過去の否定であると考えられる。西ドイツをはじめ他の国々から“良くて新しい”ものが大量に入ってきたことにより、今までのものが“悪くて古い”ものになったのだ。そしてそれを身につけていた頃の自分ごと“ダサイ”ものになってしまった。

『まだ僕らの社会に残っていた東西の亀裂を、サッカーは埋める役割をした』というモノローグが挟まるシーンがある。ここでのサッカーとは1990年のFIFAワールドカップの

ことであり、この大会では西ドイツが優勝を果たした。サッカーはドイツ国民に大変愛されているスポーツであるため、優勝によって東西ドイツ国民のナショナリズムが高揚したのだと考えられる。この時点ではベルリンの壁が崩壊しただけで東西統一は行われていなかったが、統一後にオスタルギーが生まれたことから、“亀裂を埋める役割を果たした”のは一時的なものでしかなかったと言える。ドイツ国民が一体感を抱いても非日常の出来事でしかなく、日常に戻って不満を感じればまた互いの間に亀裂が生じてしまうのだ。

アレックスが母親に「ピクルスが食べたい」と言われ、東ドイツ時代にあったピクルスを求めて買い物に行くが、店の陳列棚にはほとんどなにもなかった。また後日あらためて買い物に行くが、スーパーは西側の商品であふれかえっていて、母のために買おうとしていた旧東ドイツの商品は何一つなかった。「東のピクルスはないのか」とアレックスが店員に尋ねると、店員は「西側マルクの時代に今さら昔の商品なんか」と返す。やはり西側の商品のほうが優れたものであり、東側の商品の需要は少なかったのだろう。結局アレックスはオランダ産のピクルスを買うしかなく、ピクルスの中身を詰め替えるためにゴミ箱から東側のピクルスの瓶を探していた。その際に通りがかった近所に住むガンスケという老人に「東西統一のせいでゴミまで漁るハメに」とぼやかれるが、ガンスケは東西統一のあおりを受けて失業中であり、東西統一への不満が募っていた。

アレックスの母親は東ドイツで教職を降格させられていた。当時母親が務めていた学校の校長はその理由を「集団主義者にとっては理想が高すぎた」と語る。アレックスの母親は政府に表彰された経験を持つほど熱心に社会主義活動に勤しんでおり、労働者のためにより良い社会を作ろうと奮闘している様子が描かれていた。しかし個人が突出するよりも横並びであることが良いとされる集団主義にとってはこういった弊害も存在したようだ。共同体としての意識が強い反面、出る杭は打たれるような風潮があったのだろう。

アレックスの母親が以前より仲良くしていた近隣住民には事情を話し、ベルリンの壁の崩壊及び東西ドイツ統一を隠すことに教職してもらったこととなったが、その中の一人の女性が「お母さんと話していると昔が戻ってきたみたいで楽しい」と話すシーンがある。東西統一への不満や不安を忘れ「想像の共同体」だけになってしまった東ドイツに回帰できるのだろう。東ドイツの頃のまま保たれた部屋で東ドイツ国民のままでいるアレックスの母親は、失われた東ドイツの再現のように感じているのではないかと推測する。

アレックスの姉の再婚相手は旧西ドイツ出身であったが、アレックスが彼と口論になった際に「東ドイツ人は文句が多い。いつもブツブツと」「西ドイツ人は無関心だ」と言い合う。前述にもあった言い方であり実際にそういった傾向があるのだろうが、ステレオタイプのようなものになっているのではないかと推測する。ここからも”ドイツ人”という一つにまとまった国民意識ではなく、“東ドイツ人と西ドイツ人”で分けて認識していたのだろうと

推測できる。

『世の中は流れを加速させてた。僕らは巨大な加速器の中の微粒子のようだ。母のいる寝室は新時代のペースから逃れて安らげる避難場所だった』というモノログが入る。世の中の変化はあまりにも目まぐるしく、それに翻弄されるまま抗うことができないというアレックスの心境が現れている。最後にアレックスは東西ドイツの立場が全く逆転した“理想のドイツ統一”の偽ニュースを作り、母親に見せる。西ドイツに吸収される形で統一され、東ドイツばかりが西ドイツに合わせて変化していくことに、劣等感のようなものがあったのではないかと推測する。この映画は公開後にドイツで大きな反響を呼び、ドイツの歴代興行記録を更新した。オスタルギーをテーマにした作品であるのと同時に、この作品の製作・鑑賞自体がオスタルギーの一つだと考えられる。

#### 第4章：現在のオスタルギー

statista が 2017 年に行なった調査によると、ドイツが同一され一つになっていると考えているのは 60 歳以上が 40%、45 歳から 59 歳では 46%、30 歳から 44 歳では 60%、14 歳から 29 歳では 62%、14 歳から 21 歳では 65%であった。物心ついたときにはすでにベルリンの壁が崩壊している世代が、どれも 60%を超えていることがわかる。この世代は「故郷」として東ドイツを持たない世代である、このことから、「想像の共同体」としての東ドイツが縮小していつているのではないかと考える。

近年オスタルギーに変化が見られる。元来の「壁があった頃のほうがよかった」という意識だけではなく、旧東ドイツの“モノ”に価値を見出しているのだ。主な例を挙げると、アンペルマンやトラバントである。アンペルマン(Ampelmann)とは 1961 年に考案された、人の形をした歩行者用信号のデザインである。1970 年から公的に歩行者用信号機として認められ東ドイツ各地に広がっていったが、東西ドイツ統一によって西ドイツのデザインに合わせられることとなった。しかしアンペルマンに親しみを感じていた人々の働きかけによって撤去を免れ、ベルリン州では正式な歩行者用信号機となった。ベルリン州以外の旧西ドイツ地域でもアンペルマンが設置されている地域がある。このデザインは大変人気があり、2001 年にはアンペルマンのグッズを販売するアンペルマンショップが立ち上がった。これは 2012 年に旗艦店がオープンし、現在はドイツ国内に 8 店舗あることからその人気がうかがえる。

トラバント(Trabant)とは東ドイツで生産されていた小型車である。決して性能が良いとは言えない車ではあるが東ドイツ国民からは非常に愛されており、トラビ(Trabi)という愛称で親しまれている。現在ドイツでは排ガス規制のため、市街地では許可を得なければ走

行できなくなっているが、2010年の時点でこの特別許可が登録されているトラバントはフォルクスワーゲンのビートルの5万台に次いで3万台にのぼる(毎日新聞)。さらに旧東ドイツ時代にはチェックポイント・チャーリーという名の検問所だった場所には現在「トラビワールド」という施設があり、様々なトラバントが展示されているトラビ博物館やトラバントの試乗体験などができる。この試乗体験については正確な人数ではないが、公式フェイスブックのアカウントのレビュー数が2013年からの全171件中、この3年間だけで100件に及ぶ。

アンペルマンとトラバントに共通しているのは、海外からの観光客にも人気が高いという点である。旧東ドイツをコンセプトに作られた「DDR<sup>4</sup>ホテル」というホテルが高い評価を得ており、日本でも旧東ドイツのものがレトロで可愛いという意見がある。このように「モノ化」したオスタルギーが増えつつあるのではないかと考える。加えてこの「モノ化」したオスタルギーが「想像の共同体」としての東ドイツを持たない外国人を中心に流行っていることから、今後ドイツ国民から「想像の共同体」としての東ドイツが消失すれば「モノ化」したオスタルギーのみが残るのではないかと推測する。

#### おわりに

国家が消滅しても「想像の共同体」としての国家はすぐに消滅するわけではない。そこを「故郷」として認識している人がノスタルジーとして「想像の共同体」を構築しているのである。

オスタルギーとはそのノスタルジーの一種であり、東西ドイツ統一による東ドイツの急激な近代化や価値観の違い、旧東ドイツ国民の劣等感などによって生まれたものである。東ドイツに不満を持っていた国民は多くいたが、反感を抱いている旧西ドイツ人によってアイデンティティーの一つでもある過去を否定されることによってより強く反抗意識を抱き、さらなる「故郷」の美化に繋がったのだと考える。

オスタルギーは当初「壁があった頃のほうがよかった」という意識のことを指していたが、近年これが「モノ化」している傾向がある。これは旧東ドイツを「故郷」として持たない人々の中により頻繁に見られるのではないかと推測する。そのため、このまま世代交代が進めば「想像の共同体」としての東ドイツもいずれ消滅し、「モノ化」したオスタルギーのみが残るのではないかと考える。

---

<sup>4</sup> Deutsche Demokratische Republik(ドイツ民主共和国)

#### 引用・参考文献

ベネディクト・アンダーソン,白石隆・白石さや(訳)『定本 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山,2007

成田龍一『「故郷」という物語 都市空間の歴史学』吉川弘文館,1998

三島憲一『現代ドイツ—統一後の知的軌跡—』岩波新書,2006

ルドルフ・バーロ,永井清彦・村山高康(訳)『社会主義の新たな展望 I—現実に存在する社会主義の批判—』岩波現代選書,1980

高岡文章『近代と／へのノスタルジー—近代化遺産と昭和ブーム—』2007

ロルフ・ヘッカー,尼寺義弘(訳)『東ドイツ社会主義の挫折と今日の状況』1994

上村邦彦『東ドイツにおける社会主義と市民社会：言説史の試み』2017

木村明夫『東ドイツの日常生活空間：ホーネッカー前期時代』2006

楠根重和『西ドイツに飲み込まれた東ドイツ人』2004

クリストファー・ヒルトン,鈴木主税(訳)『ベルリンの壁の物語 下』原書房,2007

平野洋『伝説となった国・東ドイツ』現代書館,2002

ヴォルフガング・ベッカー,ベルント・リヒテンベルク『グッバイ、レーニン!』2003

emnid, “Tiefensee: DDR-Geschichte muss weiter aufgearbeitet werden” <[http://www.issor-sozialverein.de/Archiv\\_Webseite/Standpunkte/2009/Tiefensee%20zu%20EMNID-Umfrage%20DDR.htm](http://www.issor-sozialverein.de/Archiv_Webseite/Standpunkte/2009/Tiefensee%20zu%20EMNID-Umfrage%20DDR.htm)>(最終アクセス 2019年12月6日)

bpb, “Die Ausgangslage in Ost und West” <<http://www.bpb.de/geschichte/deutsche-einheit/zahlen-und-fakten-zur-deutschen-einheit/211356/die-ausgangslage-in-ost-und-west>>(最終アクセス 2019年12月9日)

statista, “Deutsche Einheit?” <<https://de.statista.com/infografik/11317/zusammenwachsen-von-ost-und-westdeutschland/>>(最終アクセス 2019年12月9日)

ファイル名 : 卒論.docx  
フォルダー : /Users/osamunote/Library/Containers/com.microsoft.Wor  
d/Data/Documents  
テンプレート : Normal.dotm  
表題 :  
副題 :  
作成者 : 立山 千夏  
キーワード :  
説明 :  
作成日時 : 2021/04/27 14:38:00  
変更回数 : 2  
最終保存日時 : 2021/04/27 14:38:00  
最終保存者 : Microsoft Office User  
編集時間 : 0 分  
最終印刷日時 : 2021/04/27 14:38:00  
最終印刷時のカウント  
ページ数 : 14  
単語数 : 14,443  
文字数 : 1,354 (約)